

の今多、蜜柑の皮を代用する。陳皮の陳は、陳腐の陳と同じく舊りた義。薩摩歌のこの文は、陳皮は藥種として効用殆んどないから、絲瓜の皮と同意にいうたものである。

ちんぱい 新田左中將義貞、楠判官正成、陳平、張良が肺肝より出でたる如き名大將(女稱)

〔陳平〕陽武の人で、智謀に富み、漢高祖沛公)を輔佐して天下を定め、官丞相を経て曲逆侯に封ぜられた。

つ 我もそもじと同船して、斑女が色に氣壓され花蓉に花の色なしと、唐土までもつを引かせん(偶田川)

〔睡〕困睡などいふ睡で、蕪の意にいうたのである。「睡を引く」とは、蕪の絲を引く、即ち垂延する意。

* つないしを見よ。

* ついち 人人はついちの隈に逃げ給ふ(蠲丸)

〔築塼〕つひち(築塼)の略。板を心として泥土を塗り、層層を瓦葺にした垣。和名抄に「築塼」と當てである。

ついなんどり 悪い聲付、同じ物の言ひ様であら畏つたとついなんどりとお受けならぬ事かばと(賣橋)

ついは「ちよつと」の意。「なんどり」は「などり」の音便。「なごやか」「おだやか」の意。古事記上に、「今こそはちどりにあらめ、の

ちはなどりにあらんを。」

* ついまつのうたがするた 貝おほひは手もつめたし、いざついまつの歌がうたひかがあらんと宣へば(幾) 琴の連弾ついまつの歌かると、逢坂山のされかづら、悪い處(氣を廻して(絶勢))

ついまつ(松明)といふも、歌がるたのことである。女重寶記(元祿十五年刊)巻之一、大和書葉の條に、「歌がるたはついまつ。女用給本花の宴に「ついまつ。歌がるたの事なり」真丈雜記)巻八、調度之部に、「歌がるたといふ物は古なし、近代出来たる物なり、本は貝おほひの貝より思ひより作りたる故、本名をば歌員と云ふ也、又伊勢物語に、松明(た)いまつ(の)事)の條にて歌の下句を畫きたる事ある故、歌員も上の句に下の句をとり合するによりて、ついまつとも名付くる也、歌がるたといふは田舎詞也、かるたといふ物の形に似たる故云ふなるべし。」

つう お梅につうを失ひし久米が心ぞ哀れる(萬年草)

つう通力) お梅に通を失ひし云云を見よ。

つうくつ 惣兵衛とつうくつ致し、茨木屋をば私請合ひ(淀鱈) 今宵の中に後屋とつうくつして、せんよな明日から呼取り(酒香草)

つう通) つうとりと談合すること。通は心中を通じ合ふこと。「くつ」は「あちくつ」の條を見よ。現今中國地方で、情を通じまたは都合ふを「つうつうする」「つうくつする」というて往往用ひてある。

つうじ 女房傍からつうじして、まがこれお寝りませぬ(反魂香)

〔通事吃〕などで意思を通じられぬ者の間にあ

つて、取次いで話すこと。通辯。

つうづ 女と思ひ怪我するな、並やつうづの女でない(雪女)

通途の字が當てである。通常。なみ(並)。十人並。念珠略語、歌聲略語の條に「凡そ念珠に多押あれども、一百八顆を以て通途とす。和訓表に「俗に十歳二十歳をつづはたちといへり、文選に十をつづと訓す」と見えたる。

つづも「つづ」と同じ語であらう。「通途」の反對を別途ともいふ。



〔冠天通〕

つがなひ 心拍子に乗かけは六番かしら使者番(堀川波鼓)

〔使者番〕人倫訓蒙圖彙一に、「使者役は公界に出ず第一の面道具なれば、其器量をえらび發明にして辯舌あざやかにて、禮式を知り文字を知りて片書をいはざるをよとすべし、妻者又同じ。」

* つがもない ハアつがもない、私は大坂者(女服切) アアつがもない、わしは萬歳に近附はないわいの(大經師) アアつがもない、此輩の葉にどう乗られうぞ(聖徳太子) 恥も哀れも打明けて、つがなくこぼす正月の、涙も顔に憎からず(露門松)

つがもないの義。嫌も無いら、とんでもない、わけもない。本朝假名(正徳五年刊)に「つぎもなし。俗はつがもなしといふ、不都

つがもなしの義。嫌も無いら、とんでもない、わけもない。本朝假名(正徳五年刊)に「つぎもなし。俗はつがもなしといふ、不都

合といふごとし。遊覽覺書卷九に「つがもなき。箕山大盛に、わけもなきといふなり。」

* つぎ 四筋の町の軒深く、燈火星の如くにて、三五以上の月の顔、さす汐影のわけもよき(露門松)

〔月〕この文は、十五夜の月に月をかけて、「三五以上の月」というたのである。「わけも」を見よ。

つぎかみしも 冷泉造酒之進房平、浅川やうの繼下かいらざ作り(長刀、さすが育も小姓あがり(女池))

〔繼士〕上下の一種、徳川時代に士人の着用した服で、肩衣に常の袴を用ひ、肩衣と袴との色合地質の相異つたもの。遊覽覺書に「つぎ上下は享保まではその略服にて、暖氣の時など着用し冬は決して用ひざりし、元文の末御役人平日は染上下に不及、つぎ上下小紋編類取交用候、とありてより押並て繼上下着用になりし、天明の今は歴々も極寒に用らる。」

つぎがんな 天の川原に橋ばしらしらげたつるや突鉤、雲をそなたにやり(出世景清)

〔突鉤〕刀幅廣うて兩端に柄をつけ、突出すやうにして木を削る鉤であつて、捕獲などの使用するもの。

つぎきざし 月草のなかだち、顔を見合せ(用明天皇)

〔月草〕露草の古名。

* つぎげ 太郎鶴毛次郎鶴毛と申して(大磯鹿) 二十日の月毛の胸の尾



〔ききつ〕

髪亂れて(丹波興作)

〔鶴毛〕馬の毛色の名。鬣毛の少し赤はあはるもの。(白馬馬、桃花馬)。丹波興作のこの後の文に、同じ馬のことをいうに「丹波くりげ馬」と書いてあるが、栗毛は栗色で、鬣の黒いもの(鬣)をいひ、鶴毛とは別であるが、多少色の似た所からかくいうたのである。

*つきしろ 東の山に茜さし、はや月しろも上つたり(槍狩)

〔月代〕月將に上らうとして東天白み渡る時を云ふ。轉じて月をいふ。

*つきだし 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)

〔雲門松〕五月十五夜突出し出立げえ(無門松) 霞の袂虹の帯、雲の上衣をゆりかけて、五月十五夜突出し出立げえ(無門松)



〔雲門松〕

〔持〕つて行きて、謎元結の目に立つ程に折掛け。

*つきともない もつとも掛け負うたれども、節季でもある事か、つきともない今日限りこのやうにせがむのは、ムム合限ちや(二枚繪)

〔月ともない〕月末も無い意。寶掛の集金は節季若しくは月末に行つたものである。(つき附)もなうとは別。

*つきのみふね 三五夜中の月額、月の御舟に水枯さし(加増曾我)

〔月御舟〕月の御舟を水を渡るに見立てて云ふ大語。玉葉集巻八、旅歌の部に「暮れぬとて泊を急ぐ浦波に、月の御舟を出で代りぬる。」

*つきふさがり 思返せば胸塞り月塞りの駒の足(大經師)

〔月塞〕在時降陽家の云々たもので、正五九日は北、二六十月は東、三十七一月は南、四八十二月は西を塞り稱して、其方角に向つて家造精旅行等をするを忌む。この文は大經師に關係する層上の語を用ひて文飾としたら願してである。

*つきはらぬ 老木の松はつれなくつて、初咲櫻つきは梅、盛りの花の嫁達の(會橋出)

〔接穂梅〕接木をするに接がれる幹を盛木と云ひ、接ぐ枝を接穂と云ふ。接穂梅は接木の梅である。

*つきまぢ 此國の險者那智の妙法坊と云ふ山伏、月待の歸るさに此所を通られしが(用文章)

〔月待〕在時、三日、十七夜、二十三夜、二十七夜に行はれ、其式は月待と同じものである。日待の條を併せ見よ。この文は妙法坊

が月待の會に講ぜられて行き、その歸途此所を通つたのである。黒川道祐編「日記紀事」正月の條に、「三日十七夜二十三夜二十七夜有待月、其式相同日待。」

*つきもしほも つきもしほも無う半七は何用あつて上られた(安原切)

〔安原切〕父様つきもしほも無い鐵炮何になさるぞ(三國志)

〔附〕も無いとは「似つかはしうない」嫌もなしの意。「しほも無い」は「愛想もない」にべもなしの意。何の嫌もゆかりもない。

*つきゆみ 今は力もつき弓の、いる甲斐なきに駈廻り(門出八島)

〔櫛弓〕櫛弓で造つた弓。この文は櫛に箭をいひかけたのである。

*つきく 銀の銃打つたる鐵の棒提げ(孕常盤)

〔銃〕もと月に打つ折釘を云つたものであるが、轉じて銀に云ふ。五武藝談に「弓のとなが、矢ずりの處に打つ折釘をいふ、これは矢のこぶしより外れて、矢こぼれせぬ爲に打つなり、但これは人の好にまかせてう」と見えである。

*つきく 傍輩どもがけんれじつについて錢儲けする羨しさ(丹波興作)

しやんぐしやんぐと鈴鹿で皆ついである、此處へもちよつと出かけてまた六百してやつた(丹波興作)

男と女と喧嘩して、謎に「扱になりしやら錢をついたも、謎に見た(歌念佛)

〔笑〕突出す。手に錢などを握つて突出す。この語多く博奕に用ひられてゐる。

*筑紫琴 (三世相)

俗曲を奏する十三絃琴をいひ、後奈良天皇の頭肥前の賢願といふ人これを作り、寛文頃筑

後の善通寺の僧法水が關東にあつて其技を傳へたといふので、この名がある。また筆をもいひ、宇多天皇の時筑紫の石川色子といふ人、豊前國彦山で異國人からその技を習ひ傳へたといふのである。この名がある。

づくにふ 「すくにふ」を見よ。

づくね 「つらね」を見よ。

*づくほう 敵の棄てたる鎗・長刀、つかたげ

〔最前寺懸〕

〔突稱〕狂時罪人などを捕へるに用れた三道具の一。頭部は鐵で作り、多くの尖齒があり、そして長く、挿木の如き、形のものの中村揚、齋藤、訓蒙圖彙に「鐵把。今按俗云づくほう、鐵把同。」

つくまのなはずみ かの髪染むる薬をと仰に任せ、腰元逢思ひつく摩の鍋墨を油に溶きて採附け(弁筒)

〔洗筆墨〕この文は、思ひ付くを洗筆にひかひけ、近江國坂田郡筑摩神社の鍋墨を鍋墨にひかひけつづけたのである。筑摩神社四月八日の祭禮に八乙女が各鍋墨を戴き、神饌を備へるのが古の遺風なる由、文徳實録に見えてゐる。中川喜雲撰案内巻二、四月朔日の條に「江州筑摩縣此所の女房は夫をかきぬし歌ほど、祭の時鍋を被くとなり、昔ある女多くの男にあひける、これを體きんとて入り鍋をつくり、大なる鍋に入れて唯一つ戴きたるやうにして祭の日渡りしかば、此女道にてこぼれば、鍋多くづれ出でつづあらはかき侍り、今は祭も絶えて名ばかり残れり。」

つくもがみ

〔百歳〕一歳足らぬつくもがみを見よ。

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもがみ

つくもさん つくもさんの定家様(三國志)

【九十九】和歌三十一文字を九十九三に切つて書くこと。九十九を「つくも」といふは、伊勢物語の歌「百年に一年足らぬつくも髪、我を戀物とし餅に見ゆ」とあるによつたもので、蓋百といひかけたものかといふ。

つげがみだい

【じふふ】のりのつげがみだいを見よ。

*つげさ 人がつげさを望まば、ちよつと噎つて飲まざればよし(浦島) 半分飲んで差しければ、こは珍しいつげざしと、押戴いて飲んだりけり(城川波渡)

【つげざし】(附差)の略。飲みまじの盃または煙草の喫しつづつあるものを人に取らすこと。井原西鶴撰・天下馬巻二「睡るものと金の錦の様に」後にはつげざしまさま、我を驚えず酔出でければ。

つげし 所所に附城築き、兵糧軍兵込め置きて(國性濫)

【附城】向城ともいひ、敵城に向つて城を築き、兵糧軍兵を込め置き、敵地に侵入して戦ふに便したるもの。

*つげだす 滋賀の里にて早廣を附出した、さあ今ぞ日頃の運試し天の興へ、あら嬉しやとばやれども(錦丸)

【附出】常に心を附けて探し出す。附け出すの附は、附け狙ふの附けと同じ語。

つげもの 明德の御神樂つげもの事御尋ねに預り候(三世相)

【附物】聲樂に伴奏する樂器。神樂では和琴が主で、笛・竈篋は附物である。

*つごうど はれやれやれやれきり

きり乗らしやれ、馬やろいとぞつごうどなる(舟波與作) 残物は遣つて仕舞うた、通りやつごうどなり(博多) うそやと覗き佇み、つごうどに大聲上げ(持統天皇)

【つごうど】を見よ。

*つごうど 梅龍内よりつごうど聲、かしましい何者ぢや(天經師) 引ずりに往てお客の前で恥かかさうかと昔作りのつごうど聲(安腹切) あれ親仁殿、熊野屋から呼に來た、はよ往かしやれおりや往かぬ、きりきりさしやれとつごうど聲(番風申)

【つごうど】(笑言聲)の約説であらう。つごうどとは「つごう」とも云ふ。とがりごえ(尖聲)・腹立げな無聲怒聲・語録字義(元祿七年刊、藍吹子の序文があるに、「驚突。ヤサシゲモノキコトナリ、俗ニツカフドナルト云是也)。

*つじあんどう 鐘は幾つ八つか七つか 噓風の、辻行燈を吹消して道も心も眞暗くら(歌念佛)

【辻行燈】辻番所の行燈。辻辻に番所を設置して町内を警戒したるを辻番所と稱した。天和二年二月の奉行所の觸書に「辻番之儀、相定人数無二懈怠晝夜可務之、夜中たりといふとも方々明滅不廢」

番を致し、請取之場所切見見廻之、若狼藉者又は手賣たる輩其外不審成者於來は早速出向留置之、辻番組合中へ申達可り得送國一事、一、突棒・さすまたもぢり稱續松・早睡・提灯・番所に可差置、鎗長刀

【總行辻】



【總行辻】

は可憐無用「事」などの簡條が見えてゐる。つじら 「まさしかれ」を見よ。

つじだんぎ 人を導く六道の辻談義こそ殊勝なれ(錦丸)

【辻談義】辻談法とも云ふ。僧衣を着し路傍に立つて往來の人々に向つて佛敎の法話をなすこと。で、信長紀十四にも、「さも辻談義坊主の筒子に上りていかへに説法し、詰他法術自法にも猶超えたりけり」と見え、更に轉じて講談と後のであるが、元祿から享保頃にかけて辻談義はほぼ京阪地方で盛行はれ、人生の無常轉變を説いて人人にあらはれを催したものである。錦丸のこの文に「まことに羨ましいかな歌かしかな、今日の衆生一生造惡不斷煩惱の塵にまじはり、……怨ち安養無垢世界不退快樂の都に到らん、何疑のあるべき」とあるは、辻談義口上の文である。以てその内容の概略を察知される。

*つじはるか 若草山の煙草賣、つづら山には辻放下、飛火の野邊の燒豆腐(天籟冠)

【辻放下】辻に立つて歌舞・輕業・手品などをなす興行を云ひ、田樂の類である。謡曲放下僧に「このごころの遊び候は放下にて候程に」とありて謡曲拾葉抄に「唐土に於て此類ありて、或は案の上を走り、刀を呑みなどする、こ、障より以前には是を百韻と名づく、日本にて是を田樂或は放下とも云也」と見え、人倫訓蒙圖彙(元祿三年刊)卷七に「放下は字訓の意はななくだす也、福家に於て諸縁を打捨つるを放下するといふ其意也、九とへば鼻の上に立物をし、就を重ねて自由に使ひ、山の宇を隨にするたぐひ、皆これ變化不思議の體をなすこと、萬事の當體を放下して物に滞りなき體にしなす故に放下といふ也、

あや折金輪つかひ皆放下なりしと見えたる。つじら 「さんしやうだい」を見よ。

*つじだ これより修行をかへて一字半錢の頭陀をため(實古敎信) この鳥羽の里、日に一遍頭陀の修行なされたきとの御願(孕常盤) 朝な朝な頭陀の行、はつちはつちも空耳潰し(博多) 頭陀の袋・麻衣・鐵鉢を御手に据え(孕常盤)

【頭陀】梵語 Dhuta である。抖擻と譯す。煩惱の塵垢を去り清淨に佛道を修することを云ふ。轉じて行脚の意に云ひ、諸方を行脚して米錢の施與を乞ふを頭陀の行と云ふ。行脚の時に三衣及び施與を受けたる物を容れる袋を頭陀の袋と云ふ。また死者を葬る時に六道錢などを容れて、胸に掛けます袋をも頭陀袋と云ふ。「十二の頭陀」を見よ。

つちけ 早う拜みたいときよろきよろするも土氣なり(兼好)

【土氣】土々々々。野暮。「土は土百姓など云士土で、賤人を見せたい。」

つちのえり (女殺油地獄)

*つちのこ 供先打割るつちのこの、鐘持奴が糸髪も、はり退け突退け割つて乗る(扇八景) 節分豆撒き年男、槌の子抱いて稻積んで(露門松) 鯛の頭梅が香の、解けそめたる下紐は、心あろそ豊か(ちのこまで、春めく御代こそ豊か(なれ雪女)

【紐子】大椎頭、即ち後臨前額の突出した頭。隈城翁短氣卷二に「大方は針手のきかね越の子はやりてなつて果つるも多し。都ひながた(正徳四年刊)中巻に「ちとさまのかた

三三七

「手づから縫ひして、指貫の手際皆目の縫の子なり」と。曾我八景のこの一文は、供先打刺の縫に縫の子をいひかけ、露門松のこの文は、縫の子抱いて寝るに、縫を持ち儀をふまへた大黒天をきかせたのである。木柵頭は恰好が悪いに上つて、粟林子作、釋迦如来誕生會に「袴縫頭槍頭、報いを問うて聞きやらぬか」と見えてゐる。

「殿達方はふつとつつに出逢うて、大きな腹を持ちかけられまいものでもない(蛙合戦)」

「つつもたせの略」「つつもたせを見よ。」

「つつや二十の黒髪に、變らで澤の附くならば何か寶の惜しからん(弁筒)」

十九をいふ。十のトをツに通はし、一ツ二ツのツを添へてさへるもので、十なるを誤つて十九のことにならぶ。

「千兩二千兩はつつおでもあらん(淀豐)」

「つつおちま」(落米)の略。米の落こぼれを云ふ。嬉遊笑覽に「今米さしといひて竹にて作り、儀にさしこみて米を出す筒あり、それより落こぼれたるをつつお米といふ、永代藏に、水揚の折節こぼれすたれたる筒を米をばき集るものを筒落籠といふことあり、もとは筒より落ちたるなれど、後には唯落こぼれたるをいへり」と聞ゆ。

「一昨日の夜からつづきが来て、今宵は猪の七年物、特牛程なをしてやつて(持統天皇)」

「善」好運が續くこと。

「うお傾城の詰開さばむづかしさうな事や(露門松)」

徒空の義か。つくねん。大藏流狂言二人大名に「只つくりとさぞ致いで居れば浜寄事でごさる。」

「つつかし、つつかしの顔でつらりと九文十文づつ、百の口を抜いて置けや(心中萬年草)」

「筒轉」筒は鏡筒。「ごかしは」手ごかし、お爲ごかしなど「ごかし」と同じ。筒轉しの類とは、筒轉しに百文の額の意、即ち鏡筒で置つたのだから百文あるに間違ふやうな願ひして誤魔化すこと。

「姉も共に勘當ぢやと喚き散してござりました、それで走つて来ました、あああつなやと息をつぐ(生玉)」

「あつない苦しい(女殺)」「アアづつない苦しい(女殺)」

「なう聲高い御前へ筒抜け、今横になつてお休み、御目が覺める物靜にといへども聞かす(三國志)」

「奥の事は筒抜け、飛脚よりましたぢやもの童女、あいつが見た事聞いた事、其目の中いづかが名を筒抜けけと附けて置く(生玉)」

「筒抜け」一方の口から他方の口へ物が抜通るやうな話などがの儘に漏洩すること。

「柳町のしやしうしやうていども請出して上方さなへつづば(博多)」

「長崎及び薩摩國に現今も、走るを(突走)」

「つっぱしる、倒れるを「つつかく、折れるを「つん折れる」、曲るを「つん曲る」といふ。薩摩國語にはかやうな接頭語の添はるものが少くない。」

「玉は寝もせず寢所に、只つっぱりと起き居たり(大藏經)」

「つぱり」うわびいさまと身を小さくしてあるまじい。粟林子の文中に、ぼへやりとして平氣な様をいふに「ぬつぱり」「ぬつくり」とも書いてあるやうに、「つつぱり」「つつくり」も同じやうな語であらう。

「はかた言に「獨り立ちたたまにふ語」と見え、狂言二人大名(大藏流)に「只つつくりとさぞ致いで居れば、浜寄事で御座る」と見えてゐる。」

「變る姿のつつましや、相見ること(これ限り(反魂香))」「價」恥かしい。事を慎む義。敬ふをつつむといふのも、心のあらけす包みこめる義である。よつてまたは「つかし」の意にちふ。源氏物語「帯木の巻に、「涙をもらしおとして、め、ち、恥かしくつつましげにまぎらはしくし」」。

「日傘さすてふつつまもで、思ひ思ひに携へて御供申し出でにけり(伊豆日記)」

「筒守」小さい竹筒に鈴を附けて小兒の守とするもの。小笠原傳書に「筒守の事。嬰兒宮室の輿の先に懸緒を片緒にて引き懸くるなり、その外他へ出で給ふにも同じ事なり。」

「ばやせやばやせつづみ草(十二段)」

「假草」源公英の異名。假言集覽に「假草。たんぼぼ也(ひそめ草)たんぼぼ鼓草といふ。この文は草の名語をつづみにつづみ草をいひかけたのである。」

「美入局など書いてある。夫となれ合の上他人と姦通し、それをかりに金銀を強請すること。美人局と書くは、通俗編に「武林舊事遊手好遊者所謂美人局者、以過妓(偽爲)妻妾、引誘少年爲事、有水功徳局以求官賞、認職交易爲名、假借聲勢、賊三漏財物、元典章大徳十年蔡局騙條亦言三及美人局」とある故事に據つたのである。風流徒然草に「筒もたせとて、男合點にて女房をうまくこしらへ、そそりなる者を引こき、首尾よき時分夫出あひねだつて金銀をとりける。」

「時に忠信繫目結の直垂に緋絨の鎧を着、兜の緒を締め、淡海公より傳はつたつづららしいの打刀、君より下し賜はつたつづららしいの黄金作の太刀を佩き(吉野忠信)」

刀劍の名、長さ三尺五寸ある。判官物語「忠信吉野山合戦の條に、忠信はやがて御前にぞ出でたりける、三つ繫目結に白星の兜の緒を締め、淡海公より傳へたるつづららしいといふ太刀三尺五寸ありけるを佩いたりける。」

「あれ見ゆるは親父ぢやないか、つづら笠はあまめちやわ(卯月紅葉)」

「葛籠笠」つづら藤を編んで造り、婦人外出の時被つたものである。日次紀事(延寶年中成)正月の條に「至晴天。(守貞漫稿所載)則必笠編笠葛籠笠及日傘、編笠男子出行、則藤日傘藤笠、面之具也、葛籠笠婦人遊行之具也、云云。」人倫訓蒙圖彙六に、「葛籠笠、つづら藤をもつて造る、水口名物なり」我衣に「明願よりつづら笠出たり、



〔笠籠葛〕

若き女被る、緋紅淺きなり、ためにぬり内黒ぬりにしたるは老女被る、云云。好色旅日記(貞享四年刊)卷三に「むかしいせんはやろつらさがき今は見ゆる」とあるから、この立賣永頃は甚しく流行後のものである。

***つどつど** 在所の嫁入をお止めなされ下されと、つどつどと語る下心(心官)年月の御懇忘れはせぬとつどつどに頼みます、伯母様もさばと(永朝日)

***つない** さてさて圖無い大矢(會務出) ああづなう草臥た(女護鳥) 五尺ばかりの山の芋、仲間二人が指荷ひ、料理場の板敷へ蕨を放して鼻上ぐれば、半兵衛横手を打ち、扱も圖なし、御當地は芋所か一生の見初め(香庚申) 色里に無い圖な騒ぎ、よれ様方いかに(女腹切)

聚妻 六尺はつなぎびし(薩摩歌) 麗羅襪(徳島城主 蜂須賀波路守 紀の纏)

つなすくみ 耆類ながら性あれば最期を惜む綱すくみかや(舟渡興作) (綱球手綱を引ても馬のおそれ縮んで動かぬこし)

つなぬき 忍辱慈悲のつなぬき(大織冠) (舊)毛皮沓をいふ。貞丈雜記(卷十一)に、「綱つらぬきとも綱つなぬきとも云ふは大將の御沓の事なり、大將ならずとも常人もつなぬ

きともつらぬきとも云ふ(序に云)つらぬき(二箇)をつなぬき」ともいふ。信濃源氏木曾物語(淨福齋 第三)に「太刀の切先口に橋へ直逆様にどうど落ち、つなぬかれ失せければ」。

つのもじ つのもじに、ともじしもじもことわりや(源經) (角文字假名の「つ」文字をいふ)うしろの角文字「つ」を見、この「つ」は「ともじ」とし、しもじは「し」であるから、「し」としと思ふことわりやの意である。

つはいほう 夥長夥長(財附、アア) 稠慾なこんばんにや(國性爺後日) (母附西川忠英 舞華通商考(貞永五年刊) 卷二、唐船役者の條に「財附」荷物商賣諸事の日記算用を主とする彼なり。今の支那昔は「しんぱん」である。

つばちぶん ないと應へて振出す手先上りの頭八分、腰の捻に足取に(薩摩歌) (頭八分物を捧げ持つに手を頭より少し高く上げること。肩と等しい程の高さに捧げるを目八分と云ふ)。

つばな つばな亂れてみあれのの、櫻はまだし梅薫る(女夫池) 法の爲とや糊つけて、張りて乾してはつばなかし(薩摩天皇) (梨花「ちがや」(茅)の花穂をいひ、また茅をほげきすをつばなかしといふ。糸を茅花の穂のやうに摘み取つて、ほげきすをつばなかしといふ)。

つばめ 櫻咲く彌生は雁の出代りに、新夢の燕置きつけて(薩摩歌) (鶯)燕は春來つて秋去り、雁は秋來つて春去



るものとして、古今集等の部伊勢の歌にも、「春がすみたつを見ずて行く雁は花なき里に住みやならん」とある。薩摩歌のこの文は、毎年正月五日春公人の出代り時に、舊春公人來つて新夢公人の來るを、雁去つて燕の來るに喩へたのである。

つばめ 跡のこじりの帳面の、つばめ合せと親方が、鞘鳴りするぞ道理なり(女腹切) (つばめ(括の義)。總括。總計。西鶴與胸算用卷一、長刀はむかしの鞘の條に「毎月の胸算用せぬによつて、つばめの合はぬ事ぞかし」但言集覽「算用の都合をツバメと云」。女腹切のこの文は、鞘目(鏢)のことをいひかけたのである)。

***つばり** 青梅好きやらばつばりてこそ(百日曾我) (戀思)女が懐妊した當初に起る病で、この時は胸元惡しく酸氣の食物を好む。和名抄に、「辨色立成云、櫻食、和名豆波利」。

***つぶ** 打ちみしやいでも粒三文も無いば知つて居る(女腹切) いっおのれに粒三文も借つた覚えはない(大經師) 棟敷はおれに下され、巾着にして穴一のかつぶ入れませ(萬年草)

つぶしまだ 袖の模様と大磯の虎が仕出のつぶしまだ、右八文字の玉鉦や(五人兄弟) (舊島田島田「うしまだ」を見こを扁平に結うたもの)。

***つばいり** 是子供・座敷へ盃持つておちやと呼はばれば、禿どもつぶ

入のお客があるといふを聞いて(本領曾我) (遊入)局人。女郎部屋に入ること。女郎部屋で遊興すること。長崎土産に「當所は昔より揚屋はなくて、替に局人なれば」つばぬの條をも併せ見よ。

つばかさり 三幅對三つ具足壺飾の品品(鐘樓三) (鐘飾)茶道の語。其かひ(歌奇屋)の裝飾。

つばすみれ 躑躅・紫雲・英壺(華十二段) (童謡)すみれの異稱。その花の形壺に似たるが故にいふ。

***つばね** 我娘から穿簪せん、局はなきか姫をこれへ連れ來れ(冷泉節) 狭き局のありし夜の、逢ふ瀬に似たは似たれども(冥途飛脚) あれあの鼻の先の數寄屋へ病人めを打込んで置く、昔見舞に行く事無用、禿めら局の奴らでも白妙に水でも食はしたら棒縛り(霜吞童) 局女郎に擬へて牡丹晶の名盡しに(生玉)

(局)部屋をいふ。部屋を有する侍女。侍女。轉じて遊女の部屋をいふ。「局女郎」は、色茶屋に行かないで我が局で濟すやう云々たる名で下位の遊女即ち端女郎「はしを見こ」のことである。「局の奴らでも」とあるは、局女郎の奴らでもの義。「狭き局の」とあるは、見世女郎梅川の狭い部屋を云うたのである。

壺の印 その筆先に金銀もわきまなく、なつつけの狩野の



【んいのぼつ】

筆(反魂香)
葎野元信の印形である。

つばや 醫者殿は薬師如来の引合
せ、葎屋の客と脈を取る(女腹切)

つばをる 小袖の衣端つばをって近
く寄れ(源義経)
つばめ折るの略。衣をつばめ折りはまむ意
で、衣の端をからげるをいふ。

*つま 兄兄達を差置きつまの泉に
御頼み、何か違背申されん(源義経)
餘所のつまごと羨し(女腹切)

つまぎ 財寶は地獄の家産、名聞は
焦熱の爪木とも譬へたり(鰐丸)
「端木木の端の義であつて、爪木と譬は假
借字である。薪とする爲に折つた細枝。萬葉
集卷七の歌に「端上爾爪木折燃云云」。こ
この文は、財寶も名聞も共に五欲の一であ
る、人これに執着する爲に未來世に於て無量
の業苦を受けるの意。智度論十七に「哀哉
衆生常爲五欲所惱、而求之不已、此五欲
者得之轉劇、如火炙疥、……五欲燒人如
逆風執炬……世人愚惑貪著五欲、吾死不
捨、爲之後世受無惡苦」。

*つまぐし 人になつげの爪櫛
も(鰐丸)
「爪櫛齒の繁くて細し櫛。「めつつまぐし」
をいふ。

つまごひどり 人にはあらで妻戀
をいふ。

鳥の、羽音に怖ぢる身となる
は(冥途飛脚)

*つまなしがらす 供人少少召具して
つまなしがらす(三世相)
「妻無鳥」やめめ鳥をいひ、以て雛男に譬ふ。
源平盛衰記阿卷三十六、熊谷大平に向ふ條に
「やめめ鳥のうかれ聲……物哀れにぞ覺えけ
る」と見えてゐる。

つまばらみ つらや尖りてつまばら
み、安からぬ世にまひまひと、何
時まで一人舞ひくらす(松風)

つまらぬ銀 いかう詰らぬ銀なれど
も、今に先から来るわいの(重井簡)
無くては詰りつかぬ銀。無くてはどうにも
ならぬ銀。

つまみ さて御鷹はつまみ・えつ・さい・さ
しば・せう・単・このり(百日夜)

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

つまみ 雀鴉小鷹の一種、翼長五寸五分乃至七寸
二分ある。雌をつみといひ、雄をえつと
いふ。

(今宵) 母は精問・子は大盡、はつと打つたる露よりも、太夫が情いただいて(露門松) 駕籠立てさせて暇をやる、あたひのつゆも命さへ、惜しからぬ身は惜しからず(冥途飛脚) 昔は君が打つ露に命を繋ぎし蟋蟀(女夫也) 二腰のその一腰は、道芝の露の價と消え果てて(鐘樓三)

(露の太陽に照らされて消え易きに喩へて、はかなきことにちよふ。(1)露の情とは、はかなき情愛の意。好色三代男(貞享三年刊) 巻五に「草枕結び定めんかたぞなき、ならはぬ野邊の露のなまきけ」と見え、「まりとものと頼みし野邊の草枕、結ぶともなき露の情を」と見えてゐる。(2)大紋・水干・袴衣などの袖括りの緒の垂れた端を露といふ。(3)わづか、少しばかりの意にちよふ。「露塵」露はとも思はぬ」などの露はこの意である。(4)小粒銀を露をいふ。鐘頭として遣す金。豆銀(小玉銀)を投出すが露の光るに似てゐるのでかくいふ。鐘樓三のこの文は、道芝に置く露に小玉銀をまかせ、路銀の意にちよふのである。

*つららち 嫁を憎んで去りし故、子は面打に自害せしと(香庚申) [面打]己が恨んでゐる人に對して、これ見よがしの態度を取ること。面當。

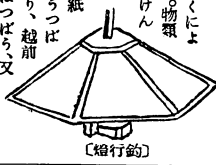
*つらね よそのつらねも我が命も、よきりなる憂きふしや(水明日) 「つらね」の略。往時行はれた小唄の一種で、鐘語を連れた文句であるが、今多く傳つてゐない。(つらねの原文は、「つらねのつらねも命も」)

えれど、「よそのつらね」とあらねば意義が解し難い。蓋し平假名の字形の相似より誤つたのであらう。

*つららふ 鬻もおどろに「つららひて唇寒き呼吸の下(冷泉集) 「つらら(水柱)を延べて渡行四段活の動詞にした語。「つらら」は「つらら(薄薄)の略であつて、古は水をいうたのであるが、後には水柱をいふ。

*つり 宰相殿の身に取つて露程も誤りなし、頼平に添ふ詠歌の姫、娘のつりとの事ならばこれ一つの申し諷(關八州) 鈎または糸の端。ちつづき(血統)。葬儀記に「糸雁」を都利波多」と訓ませてある。引つ引つて誰の迷惑にならうやらなどいふ。つりも、こゝにちよふ「つり」と同じ語である。

つりあんどろ 鈎行燈の火はあかし、いかがげせん 傾城鑑照君(享和三年刊)所載) *鈎行燈 修夜點火しおくによつて有明行燈とも云ふ。物類稱呼に「江戸にてはちけん」といふものあり、竹をもて輪を作り、普笠の如くたてに骨を組み、紙にて張り、灯を懸けつららひにだてにかくゑるものなり、越前にてつりあんどろ、又はつらら、又は「つらんといふ。大經師普庵上巻に「塵所には有明の、四角行燈六角堂の鐘とうこうと更くる夜や」とあるは、六角の鈎行燈に六角堂をひかけたのである。また大經師普庵中巻に「見る影細き鈎行燈、太平記鐘聲赤松拖籠と記せば」とある鈎行燈は、吊してある門行燈(その條を見よ)をいうたのである。



【釣行燈】

*つりおまへ 鍋・釜・壘・釣おまへ・楸味噌補まではたけ出し(女備) [鈎削削佛菩薩の畫幅。胸穿用卷一、長刀は昔の箱の條に「鈎削削に佛の道具添へて。 *つるかけ あの前はつるかけの藤次兵衛、八十八で一升の飯残さぬ(冥途飛脚) [飯懸 飯懸の樹をいふ。松風村雨東傳卷三に「飯懸の樹で見える鐘路でも、心に惚れたは氣の毒な」と見え、ある。冥途飛脚のこの文は、米露の質に斗格を切つて知人に分つ價賣ある(ますかけを見よ)によつて、飯懸と澤名のやうにひなして、八十八で一升といひつづけたのである。

*つるぎのやま お吉が身を裂く劍の山(女殺) 劍の山の上に懸しき人は見えたり(堀川波鼓) [劍山] 地獄にある劍の林立せる山。俱舍論疏世品に「等活地獄、謂彼有情雖遭種種研刺磨擦、而被斬過(瀆風)所吹尋蘇。在生要業に「鐵卒取地獄人、置刀業林、見彼樹頭、有若地獄斷頭女、如是見已即上彼樹、樹葉如刀割其身肉、次割其筋、如是劈割一切處云云。 *つるし 松よ又見世のつるし食ふな(香庚申) [吊] 毒物屋の店に吊してある果物の類(つるしは大方吊柿をいへども、こゝにへる陰曆四月に吊柿は賣つてゐない)。

*つるのひこ 三百年餘の齡を経て、玄孫鶴の彦を見る(松風) [鶴之彦] 鶴の孫に同じ。彦とは孫のこと。和漢三才圖會卷八人倫、親族の部に「孫和名古比古。つるのひこをいふ。 *つるのまに 某は六代の鶴の孫一子

由良太は浦島の七世の孫(松風) [鶴之孫] 玄孫、和漢三才圖會卷八人倫、親族の部に「孫之子爲玄孫、萬古比曾孫之子爲玄孫、俗云鶴孫。 *弦走 義貞すかさず弦走にのつか張り、首をかかんとし(女備) 證の胸板の下即ち二の板から以下、胸の正面を染革で包み、これを弦走といふ。胸の札を革で包むわけは、弓射る時弦の札に障つて堪えかねむである、よつて弦走と云ふのである。 *弦走 梓の弓の末弭に弦走して失せにけり(卯月調色) 弦音が走るやうな鳴り方をする。 *つるばみのぎよい 又五郎様の御衣取つて清瀧に打着せ(弘敷殿) [様]の御衣(薄黒染衣であつて天皇の召し給ふ凶服。様は團栗の様を染料とした染色をいふ)。

*つるびし 時代の金欄・鶴菱・たすき、花兒・寔に(鞍丹波製作) [鶴菱] 鶴の翼をひろげたのを菱形の紋にした時代製の模様。好色二代男卷五に「鶴菱の下着一つ。 *つるへ 四天王は遠巻きにして鐵砲つるべよ(三國志) [つるべ] ち(連發)の略。

*つれ 常常大頭の舞を好き、わらは諸共つれわきにて舞はれしが(反魂香) [舞] 舞などその曲の主人公たるべき者をシテといひ、シテに對する者をワキと云ふ。シテまたはワキに伴うて出る者をツレと云ふ。 *つれづれ 網島の心中もござんす、つれづれ、平家物語、なう父様何の本がよからうぞ(香庚申)

徒然草の略で、吉田兼好の隨筆書である。そのいふ所老莊孔孟の教を交へ、殊に佛説を主とし、社會萬般の愚付の儘を書きたるものである。

*つれづれ 何人なればこの様に懇にして下さると、顔をつれづれながむれば、梅川いとど胸づばらしく(冥途飛脚)

*つらつら 黝。つくづく。

*つるしめ 堆朱の香箱御前に差出せば(孕常盤)

*つみな 御大將義教公・赤沼が館に入御あつて追儼の御祝儀行はる(聖女)

*つねはう 科は何ぢや知れぬが、勝次郎は追放で八幡は煮えろ(淀離)

*つねぶく 武門の御身に御信心御孝行の御追福感し入り候(心中萬年草)

つを引く 「つ」を見よ。

つんざく 御迎にと存じ候處につんざいての御入り、外開忝く

侯(面王母) 突開で、即ち突然進んで来る意であらう。

つんばね 五したに打きり、つんばねあざばれ握りのそろでぞ勝ちたりけり(大龍冠)

つんばねに額脚をあはせて「あざばね」とうて、めくりがる大の札の名「あざ」はその様を見よ。をきかせたのである。大龍冠の文は、謡曲・海土に「乳の下をかき切り、玉を押しこめ劍を捨ててぞ伏したりけり」とあるの改作。「女房故に捨てし命云云」を見よ。

つんぶん 我夫ならで餘の男に笑顔さへ見せぬ身が、如何に智略なればとて敵と二人間に入り、つんぶんともなるまいし(懸物掛)

つんぼらうむしや 襦袢一重のづんぼらう武者(三國志)

つんぼらうむしや 襦袢一重のづんぼらう武者(三國志)

つんぼらうむしや 襦袢一重のづんぼらう武者(三國志)

つんぼらうむしや 襦袢一重のづんぼらう武者(三國志)

つんぼらうむしや 襦袢一重のづんぼらう武者(三國志)

つんぼらうむしや 襦袢一重のづんぼらう武者(三國志)

つんぼらうむしや 襦袢一重のづんぼらう武者(三國志)

つんぼらうむしや 襦袢一重のづんぼらう武者(三國志)

つんぼらうむしや 襦袢一重のづんぼらう武者(三國志)

つんぼらうむしや 襦袢一重のづんぼらう武者(三國志)

つんぼらうむしや 襦袢一重のづんぼらう武者(三國志)

つんぼらうむしや 襦袢一重のづんぼらう武者(三國志)

越の様に「晝にて候へば手過にてはよも候はじ、いかにさまも敵の寄せて火をかけたると見え候。

*ていかかづら 式子の君の浮名立つ、定家葛のほひかか(兼好)

*ていかやち つくもさんの定家様(三國志)

*ていきん 父が庭訓鬼に鐵棒(國性巻)

*ていくわく 朝敵の張本なれば鼎鏡の罪に行ふべし(唐船懸)

*ていめい 是に似たる非ありと註せし程明道の詞盛なるかな(蛭合戦)

*ていり 父様の出入も、夏物ども人手に渡し傍輩にも無心いひ、百三十奴ととのへ(丹波渡作)

*ていれは 文治二年丙午正月十日ていれは勅説如件、と讀上げ給へば(佐佐木)